

白洲が夢見た東洋のサンモリッツをつくろう！

旧白洲山荘(ヒュッテ・ヤレン)の保存・活用運動

矢口正武 | NPO法人「元気・まちネット」東京代表理事

山形支局

終戦直後に吉田茂首相の懐刀として初代貿易庁長官・初代東北電力会長などを歴任した白洲次郎の山荘が、2006年に山形県蔵王で「発見」された。

昭和20年代後半に蔵王を訪れた白洲はその魅力に憑かれ、蔵王を「東洋のサンモリッツ」にしようと構想を企てる。構想実現の先駆けとして1957年(昭和32年)、おそらく英国留学時の経験に基づく彼自身の着想に沿って山荘が建てられ、「ヒュッテ・ヤレン」と命名された。「ヤレン」の意味は「スキーはうまくやれん」に由来するといわれ、晩年を過ごした「武相荘(無愛想/ぶあいそう)」の命名にも通じる、彼特有のユーモアが感じられる。

●簡素で小規模な旧白洲山荘

山荘は豪雪を考慮して、1階は無筋コンクリート玉石積造、2階は木造の床面積約70m²という小さなものだが、1階は広い居間とホームバー、2階はオープンキッチンと蔵王の寒さを考慮した二重サッシなど、当時としては珍しく画期的なアイデアが組み込まれている。山荘は前オーナー三宅馨氏によって丁寧に維持され、若干の改装を除き、外観を含めてオリジナルの状況をよく残している。当時の彼の社会的地位から考えれば驚くほど小さな規模だが、簡素・質実な山荘は、昨年の東日本大震災にも耐え、多くの人たちにそれと気づかれぬまま、いまもひっそりと蔵王の樹林のなかに佇んでいる。



「旧白洲次郎山荘と蔵王を語るミニフォーラム」風景



旧白洲山荘外観

私たちはこの事実を知り、ともかくこの山荘を「残したい」と思い、将来の使い方も解らぬまま「残す」ことを決意した。その理由は、この山荘が白洲次郎によって建てられたからというだけでなく、その何気ない優しい佇まいが彼の愛した山形・蔵王の風景、ひいては日本固有の美しい風景を色濃く残しているためである。「東洋のサンモリッツ」という彼の構想は経済一辺倒の開発の波に飲まれて挫折した。しかし、立案から半世紀がたった今、その構想を現代においてとらえ直し、この山荘を残すことを通して彼の想いを受け継ぎたい。さらに蔵王という地域を超えて、日本にまだ辛うじて残る美しい風景を再生していくきっかけにしたいと、強く考えている。

●白洲山荘を鎮守の杜に

2006年に放映されたNHK番組「その時、歴史が動いた」がきっかけとなり、旧白洲次郎山荘がにわかに脚光を浴びると、地元関係者による「白洲次郎を語る山形の会」が結成された。その後、地元温泉関係者が現所有者の三宅美樹氏(馨氏の次女)に「蔵王温泉の活性化」に活用させてほしいと願い出て、周辺環境整備を行い、案内板などの設置を行った。しかし木造2階建ての山荘は築半世紀が経過して老朽化が目立つようになったため、同会は、所有者の三宅氏に「山荘の保存・活用」に向けた募金活動の展開を願い出て快諾をいただいた。

元気・まちネットは、「蔵王プロジェクトM・J」(M=山荘の現オーナー三宅氏のM、J=ヤレンのJ)を立ち上げ、仕事仲間の建築家塩田能也氏の協力によって、山荘の内・外観の診断を数回行うほか、「旧白洲次郎山荘と蔵王を語るミニフォーラム」を蔵王はじめ、東京や仙台で開催し、募金活動の呼びかけを行っている。蔵王プロジェクトM・Jでは白洲次郎が残した「精神性」を大切にしながら、この山荘を「鎮守の杜=核」と位置づけ、「スキー場一辺倒」の考えから脱し、「山岳・温泉保養地=蔵王=東洋のサンモリッツ」の蔵王温泉としての転換を図っていききたい。